

気候モデル/計算機をその課題とする。具体的には ECMWF 再解析プロジェクト, 高解像度モデルによる気候シミュレーションを掲げていた。

・Paleoclimate Model Intercomparison Project (PMIP)

S. Joussaume が NATO Workshop on Paleoclimate Modeling (1991) の紹介を行なった。現在 12 のグループが参加している古気候のモデリングでは、気候変動のメカニズム解明/古気候データによるモデルの気候敏感度のテストを目的として、データがかなり整備されており、かつ現在との気候の差が大きかった 6,000 年前と 18,000 年前をターゲットとしている。6,000 年前のケースは太陽の軌道要素と CO<sub>2</sub> の違いのみを調べる。18,000 年前のケースでは大気・海洋混合層モデルを用いて、氷床・海面レベル・海面水温の違いも考慮して比較実験を行なう。

・Intercomparison of Air-Sea Interaction (TOGA)

D. Neelin が「Tropical air-sea interactions in GCMs」(Neelin and Latif et al., 1992, Clim. Dyn., 7, 73-104) を紹介した。

・Ocean Model Intercomparison (TOGA-NEG)

T. Stockdale が同じ外力(Hellerman and Rosenstein (1983) の応力を 0.7 倍したもの) で駆動した 7 つの海洋モデルの比較実験の話をした。多くの海洋モデルは西太

平洋で海面水温が観測より 1°C 高く、中部太平洋で 1.5°C 低い。高解像度で水平粘性係数が小さいモデルほど赤道の海流系の表現がよく水温バイアスも小さいと強調していた(参加者からの異論あり)。次回は時間間隔の細かい応力 (ECMWF/NMC の再解析) を強制力として与えるそう。

・Intercomparison of Coupled Ocean-Atmosphere Models (SGGCM)

U. Cubasch が「気候変化 1992-IPCC レポート」に用いられている 4 つの結合モデル (GFDL, MPI, NCAR, UKMO) による CO<sub>2</sub> 漸増実験の話をした。なお WCRP SGGCM とは Steering Group on Global Climate Modelling で、Gates, Cubasch, Meehl, Stoufer, Mitchell がメンバーである。

朝 8 時半から午後 5 時まで一日中いろんなモデル比較実験の話があったわけだが、GCM を使っている者にとって興味深い 5 日間だった。今のところいくら興味があってもすべてに付き合っていくには日本はマンパワー不足だが、GCM を持つ機関が増えるに連れ多少なりとも解消されることを望む。

(鬼頭)

## 月例会「レーダー気象」のお知らせ

標記の月例会を下記の通り開催しますのでご参加下さい。

日時：1992年12月15日(火) 13:30~16:00

場所：気象庁 8階 東京管区気象台会議室

プログラム

1. 「ドップラーレーダーデータの 3次元表示」  
真木雅之(防災科学技術研究所), 宮地英生(クボタコンピュータ)
2. 「梅雨期に宮古島で観測された中規模対流系」

田畑 明, 山田芳則, 岩崎博之, 榎原 均(気象研究所), 中井専人(防災科学技術研究所)

3. 「数値モデル出力の風データを用いたリトリーブ法の開発-ユニセル, マルチセルの場合」

瀬古 弘(気象研究所)

連絡先：気象研究所 台風研究部 田畑 明  
榎原 均

TEL 0298-51-7111